

三内航海運史 II 飛鳥・奈良時代

遣隋使船と遣唐使船

古代に日本が倭(わ)と言われていた推古8年(600)、初の遣隋使が派遣されたとされている。しかし、『日本書紀』に記述はなく、記されるのは推古15年(607)に小野妹子(おののいもこ)が派遣された第2回からである。以降、遣隋使は推古22年(614)までの18年間に5回派遣されたとされるが、『日本書紀』に記述されているのは3回である。遣隋使船は、大阪の住吉大社近くの住吉津から出発し、住吉の細江(現・細江川)から大阪湾に出て、難波津を経て瀬戸内海を九州へ向かい、そこから玄界灘に出たという。遣隋使の目的は、東アジアの中心国・先進国である隋の文化の摂取が主とされるが、朝鮮半島での影響力維持の意図もあったようだ。これはのちの遣唐使の派遣にも引き継がれたが、『日本』という名称が使用されたのは遣唐使のときからである。

推古26年(618)に隋が滅びて唐が興ると、舒明(じょめい)天皇は舒明2年(630)、日本武尊(やまとたけるのみこと)の子・稲依別王(いなよりわけのみこ)の後裔ともいわれ、最後の遣隋使でもあった犬上御田鍬(いぬかみのみたすき)を初の遣唐使として派遣している。犬上御田鍬は2年間唐に滞在し、舒明4年(632)に唐使や学問僧とともに帰国した。遣唐使は遣隋使と同様の目的であったが、唐の諸制度や文化に通じた留学生・留学僧は、建設間もない日本が律令国家として整備し繁栄する上で不可欠だった。

遣隋使船の記述は乏しいが、初期の遣唐使船は1隻に120人ほど乗って、1隻か2隻の帆船で渡海したと言われている。遣唐使船は8世紀に入ると4隻となり、多い時は一行全員で500~600人にもなった。遣唐使船の大きさは長さが30m、幅7~8m、帆柱2本の平底箱型で鉄釘はほとんど用いず、平板を継ぎ合わせて造ったため、波切りが悪く不安定で、強風や波浪に弱い欠点があった。

また、この時代は季節風を知らずに航海術も未熟で、遭難する船が少なくなかった。遣唐使は、宇多(うた)天皇の右大臣だった菅原道真(すがわらみちざね)によって寛平6年(894年)に廃止されるまでに20回任命されたが、2回は途中で中止となり、実際に日本から出た18回のうち唐に辿り着いたのは16回で、無事任務を果たして帰ってきたのは、僅か8回といわれている。ちなみに、我が国の仏教に大きな影響を与えた真言宗の開祖・空海、天台宗の開祖・最澄が渡唐したのは延暦23年(804)の第18回とされている。

広島県最南端の船どころ・倉橋島(広島県呉市倉橋町)はその昔、長門島(ながとじま)と呼ばれていたが、遣隋使船や遣唐使船の内海の要路寄港地、修理のための造船の町として栄えた。遣唐使船の歴史は、倉橋町の『長門の造船歴史館』に伝えられている他、遣唐使の国内最後の寄港地とされる長崎県の船どころ五島市三井楽町にも『遣唐使ふるさと館』がある。

『万葉集』の額田王(ぬかだのおおきみ)の歌に「熱田津に船乗りせんと月待てば 潮もかなひぬ いまは漕ぎいでな」とある。これは斉明(さいめい)2年(661)、唐と新羅(しらぎ)からの侵攻を受けた百済(くだら)の救済に難波津から出た軍船が途中寄港した際に、同行していた額田王が詠んだ歌とされているが、この熱田津は愛媛県松山市三津浜とも、道後の御幸山付近ともいわれ、瀬戸内海の航路が開かれていたことを記している。



遣唐使船(写真提供：船の科学館)